西江雅之

風まかせ

どこに行っても
地球は我が家

日本交通公社

西江雅之

風まかせ

どこに行っても地球は我が家

日本交通公社

著者●西江雅之（にしえ　まさゆき）

一九三七年東京生れ。早稲田大学大学院修了後、カリフォルニア大学へ留学。学生時代より世界各地を転々とした後、現在までに、東京外語大、東大、東京芸大などの各大学で、言語学、文化人類学関係の講義を担当。主にアフリカをフィールドとする。現在早稲田大学教授。著書には専門書の他に『花のある遠景』『異郷の景色』『旅人からの便り』のエッセイ集、吉行淳之介氏との対談集『サルの檻、ヒトの檻』平野威馬雄氏との対談集『貴人のティータイム』などがある。

風まかせ　どこへ行っても地球は我が家

昭和六十一年三月十五日初版印刷
昭和六十一年四月一日初版発行

著者　西江雅之
発行人　木下幸雄
発行所　日本交通公社出版事業局
〒101　東京都千代田区神田鍛冶町三―一三　大木ビル
電話（編集部）〇三―二五七―八三六六
図書のご注文は日本交通公社出版販売センターへ
〒101　東京都千代田区神田須田町一―十二　山萬ビル
電話　〇三―二五八―〇九九八
振替　東京七―九九二〇一　送料（実費共）二七五円

写真植字　電算プロセス株式会社
印刷所　共同印刷株式会社
定価　一一〇〇円

検印省略　□落丁・乱丁はおとりかえいたします。

©Masayuki Nishie 1986　禁無断転載

Printed in Japan　801200
ISBN4-533-00608-6 C0026 ¥1100E

風まかせ　目次

プログレッソの少女（メキシコ） 6
ポル・トー・プランス（ハイチ） 11
カイエンヌ（仏領ギアナ） 18
デンパサール（インドネシア） 25
アブドゥルカーデル（ソマリア） 34
与那国島（日本） 41
トゥルカナ湖（ケニア） 49
三宝寺池（東京） 57
ニューヨーク（アメリカ） 64
マヘ（セイシェル諸島） 71
キョンジュ（韓国） 78
ポート・ヴィラ（バヌアツ共和国） 87
ラム島（ケニア） 94

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ヌメア（ニュー・カレドニア） 101
パリ（フランス） 108
マサイ・マラ（ケニア） 115
アンダルシア（スペイン） 124
ロレンソ・マルケス港（モザンビーク） 131
キョート（日本） 139
ケンブリッジ（アメリカ） 147
キングストン（ジャマイカ） 155
我が家（山の手・東京） 162
マイアミ（アメリカ） 169
ポアン・タ・ピートル（グワドループ） 177
ヨコハマ（日本） 185
カリブの旅から 192
あとがき 203

ブックデザイン　平野甲賀

風まかせ

西江雅之

プログレッソの少女――メキシコ

東京郊外のK町には、どこか国籍不明の雰囲気が漂っている。

その町の雑踏の中で、一人の少女が、汗ばんだ浅黒い腕に小型の犬をしっかりと抱いていた。

しなやかそうな少女の腕と、簡素な袖無しシャツでおおわれた胸と、肩の下までゆったりと下がっている豊かな黒い髪の間で、明るい茶色の長い毛に全身をおおわれたその犬の腹が、大きく波打っていた。

酷暑である。外側からは見えないが、胸にうずまった犬の顔の先では、尖った口がなかば開き、赤い舌が熱気を帯びた息を小刻みにハッハッと送り出しているのが手にとるようによくわかった。

と、突然、その犬が、少女の胸のあたりをひと蹴りするような動作をしたかと思うと、身軽に地面の上に飛びおりて、わたしの足元をまるで蝶々のように軽やかに跳びはねたり、じゃれついたりしはじめたのだった。

その時になってはじめて見えた十四、五歳のその少女の顔は、程良く陽に焼けていた。健康的な美しさが、顔の表情のみではなく、からだのすみずみにまであふれていた。少女は明らかにアジア人だった。しかし、どこかヨーロッパ人の血が入っているかのようにも思えた。

その顔は、瞬間的に、わたしがメキシコの南のはずれ、ユカタン半島のプログレッソで出会った一人の少女を思い出させた。そしてその犬は、メキシコの少女との出会いが縁で、〝ナビ〟と名付け、東京の自宅で飼っていたわたしの犬を思い出させた。〝ナビ〟とは韓国語で、〝蝶々〟という意味なのだ。

――うちにもこれとそっくりな犬がいたんですよ。

と、わたしは思わずその少女に言った。それに答えるかのように、少女は澄んだ黒い瞳に、はにかみの表情を見せて、無言のまま微笑んだ。それはプログレッソの少女、マリアそのものだった。

プログレッソの海岸には、カリブの海の波が打ち寄せている。暑い陽ざしの中の重い空の青と、重い海の青が、浜辺で遊ぶ陽焼けした人々をおしつぶしそうに見える。

海岸を少し離れると、気が抜けたような陸地の景色が見えてくる。何もかもが乾燥していて、まばらに生えている細い灌木も、暑さの中で活気がない。気だるそうに走る車が、路傍の野草に、白い土ぼこりをふりかけて通り去っていく。

行く手に小さなパン屋があり、そこを覗き込んでいると、「同郷(バイサーン)の人!」と、軽くはずんだ声をかけられて、わたしはマリアと知り合った。

――母があなたと同じ国の人なんです。会えばきっと母は喜びますよ。父はノルウェー人の船員だったけど、わたしの半分は韓国人なのよ。

と、マリアは言う。

わたしは韓国人でもないし、韓国の言葉も話せない。そのことをマリアに説明したのだが、それは彼女には意味がなかった。しかし、わたしはヨーロッパ人でもないし、マヤ族の者でもない。それに考えてみれば、彼女とほぼ同じ身体特徴を持つ人間だ。それだけでも同郷の人と言えるではないか。この土地で育ったマリアは、わたしのような人種を見たことがないのだろう。

マリアの家は海辺にあった。広い庭には背の高い椰子の林があり、快い風がその中を吹き抜けてくる。数羽のニワトリを追いまわして跳びはねていた犬が、わたしのほうを向いて吠えると、その後ろからマリアの母が現われた。近付けば、確かにそこには、五十代の韓国の

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

女の表情があった。しかし、インディオの民族衣裳を身にまとった彼女は、全体としてはやはりどう見ても一人のマヤ族の女としか見えなかった。

マリアの母親は、小さな時に、韓国からここ、メキシコの南、ユカタンまで父に連れられて来たと言った。そしてすぐ父を失い、マヤ族の中で一人で育ったことを話してくれた。

彼女は、韓国とはどんな国か、韓国の人々は何を食べているのか、韓国は日本とは別の国なのかと、次々にわたしに尋ねた。にもかかわらず、韓国語の単語をうろ覚えに記憶していた。そして、蝶のように跳びはねている犬にも、〝ナビ〟という名を付けていた。ナビは椰子の林の中で、白い砂を蹴散らせながら走りまわっていた。

三十年近くもマリアの母は自分の国の人々に出会うこともなかったので、自分の国の風習も、地理もほとんど記憶にない。それにもかかわらず、自分の国の言葉のいくつかは一所懸命まもり続けて生きているのだ。このことは大いにわたしの心をうった。

こんなことが縁となり、その一年後のユカタンへの旅の折も、わたしは再びこの母娘の家を訪ねた。マリアは急に大人っぽくなり、母親はますます逞しくなったと感じた。

それからまた三年たち、旅先でのある日、予告もなしにわたしは彼女たちの家の庭に立っていた。家は静かで活気がなかった。庭もいくぶんか荒れていた。出てきた母親は一挙に十年は年をとってしまったかのようにやつれて見えた。そして重々しい口調で言った。

――マリアは数ヵ月前に死にました。あこがれのスチュワーデスになり、空を飛んで数日目に墜落したんです。

旅での出会いと別れは、いつもこんなふうである。確かなものは何もない。こんなことを考えていると、目の前の母親も、椰子の林も、犬も、海も、すべてがずっと昔の思い出の一齣のようにさえ思えてきてしまう。

その数年後、東京でわたしが飼った犬〝ナビ〟も、今はもういない。二十年の歳月はやはり長いのだ。

そして今も確かに生きているあの旅先での景色といえば、わたしの目の前に立っている一人の少女のみとなってしまっているのである。

ポル・トー・プランス――ハイチ

歩みを止めると真紅の花が目の前の背の高い生垣いっぱいに、こぼれ落ちるようにして咲いていた。カリブ海の小さな国、ハイチは真夏だった。

花びらはまるで炎のようだった。そしてその炎が、澄み切った青空と、太陽の下にぐったりとのびて広がっている茶色の泥道と、白い石造りの家々から成る景色を燃やしていた。

――暑いなあ。

手の甲でひたいの汗をぬぐいながら、わたしは背後から無気力にくっついて来る二人の少女に声をかけた。

――もうすぐそこなのよ。

と言いながら、背の高い方の少女が足を止めると、わたしの真似をするかのように、手の

甲で無造作にひたいの汗をぬぐった。濡れた縮れ毛の坊主頭が太陽に光って見えた。
――すぐそこだなんて、さっきから同じことばかり繰り返していて、本当に目的の家は近いの？
と、背の低い方の少女が、もうこれ以上歩くのはうんざりだという表情もあからさまに、くってかかるような調子で背の高い方の少女に言った。わたしは、ここまで来てしまったのならばあとはもうどうにでもなれという気になっていた。なにしろ、もう小一時間も、わたしたちはこの町の住宅地域のつまらない道を、歩き続けているのである。簡素な白いワンピースを身に着けただけの少女たちの足元に目をやると、安っぽいサンダルをつっかけただけの黒い素足の上には、土埃が不規則な茶色い模様となって付着していた。
その前日、二人の少女がわたしを連れて知人の家に行こうと言い出した時に、その理由をたずねることなしに同意してしまったことが、今さらのように悔やまれた。どこを向いても黒人ばかりのこの町の中で、偶然見付けて知り合った〝黒人ではない男〟の友人、すなわちこのわたしを知り合いか親類のだれかに見せて自慢してみたい。そんな他愛のないことが彼女たちの意図だったのかもしれない。そして、その案にわたしは簡単に乗ってしまったというわけだ。
実際、彼女たちと知り合うことになったきっかけは簡単なものだった。わたしは彼女たち

に見付けられたのだった。ハイチの首都、ポル・トー・プランスは雑然とした町である。ことに人間が路上で織りなす形には整然としたものが何ひとつ見出せない。雑踏、そして喧騒。こうしたものが、せいぜい二階建の高さしかない無数の木造の建物の周囲で混ざり合い、溶けあってひとつの町をつくっているのだ。

街に出れば、黒い人間の肌と肌の間をかきわけ、路上にうずくまっている人々の黒い体をまたぐようにして越えて進まねばならない。視線が合えば見知らぬ男や女と挨拶を交わし合い、思わぬ方角から投げかけられる物乞いの声には丁重におことわりの返事を与えることとなる。そして、歩行中は頭上からの落下物に細心の注意をはらい、同時に足元の障害物を丁寧に除けて通る。さらに、我がもの顔に走りまわる日本製の自動車を命がけで避けながら道を渡る。妙な臭気と、人の汗と、人々の口から発せられる実に多様な話し声、罵り声、笑い声の中をくぐり抜ける。これがここでの散歩なのである。

海辺寄りの町はずれの広場には中央郵便局があり、わたしはそこに書物の包みをひとつ抱えてやって来た。この国で話されているハイチ・クレオル語という言語で印刷されている本を数冊、いくつかの本屋で見付け出して集めて来たので、それを東京に送ろうというのである。

朝の郵便局の内部には臭気こそなかったが、空間は人間で充ちていた。カウンターの前の

行列のゆるやかな進行の末に自分の番が来たので、係りの者にその包みを差し出すと、若い局員は航空便扱いでないとそれは受け取れないのだと言った。そして何十枚もの小額切手をどっとわたしの目の前に押し付けるようにして手渡したのだった。それは日本円にすれば二十五円とか五十円程度の種類のもので、サイズは共に縦横三センチ、四センチ程度の比較的大きなものである。

——あのう、こんなに沢山の切手を貼ったら、切手の面積の方が荷物より大きくなってしまって、宛名を書くスペースすらないではないですか。もっと高額の切手はないのですか。

わたしはなかばあきれていた。実際のところ、手渡された切手を台の上に試みに広げてみると、書物の包みの表側は勿論、裏側もほとんどが切手で隠されてしまう。

わたしとしては正当だと思う要求を、係りの者はけげんそうな顔で聞いていたが、ことなげに、

——それじゃ包みの方を大きくしたらどうですか。

と言って、すました顔である。

その時、いつのまにかわたしの背後にずらりと並んだ人の列の中から、

——ここにはそれ以上の高額切手はありませんよ。

と、たどたどしい英語で声をかけてくれた者がいた。それが二人の少女だったというわけ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.